

「枯れたいちじくの木」

マルコの福音書 11:12~25

はじめに

神が私たち人をお造りになったその本来の目的とは何でしょう。聖書の最初の書、創世記を見ますと、それは、人にエデンの園から地上のすべてを支配させ、守らせ、そしてこれを神が祝福するためであると言えます。そしてその人を神は土地の「ちり」からお造りになりました。この「ちり」とは、あらゆる物質の成れの果てであり、「ちり」は最初から「ちり」であったわけではありません。以前は石や土、動植物などの一部だったものが壊れたり腐ったりした結果生まれたものが「ちり」です。つまり人とは、完全に粉々に壊れたものから造られた存在だということです。壊れたものから造る、神はそのような御方です。その事実を覚えながら今日の内容に入ってまいりましょう。

1. いちじく

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:12 翌日、彼らがベタニアを出たとき、イエスは空腹を覚えられた。

11:13 葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、その木に何かあるかどうか見に行かれたが、そこに来てみると、葉のほかには何も見つからなかった。いちじくのなる季節ではなかったからである。

11:14 するとイエスは、その木に向かって言われた。「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように。」弟子たちはこれを聞いていた。

前回この「ベタニア」という地名は「いちじくの家」という意味で、いちじくはエデンの園に唯一その名が記された、園を象徴する果実、果樹であると述べました。イエシュアはこのベタニアを出られ、そこで「空腹を覚えられた」とあります。この記述は一体何を表しているのでしょうか。ここに使われているヘブル語はラーアーヴ(לָאֵב)と言ひ、本来は単にお腹がすいた程度のものではなく、干ばつなどの天災による、激しい飢饉を指す言葉です。

創世記【新改訳 2017】

12:5 アブラムは、妻のサライと甥のロト、また自分たちが蓄えたすべての財産と、ハランで得た人たちを伴って、カナン¹の地に向かって出発した。こうして彼らはカナン¹の地に入った。

12:7 【主】はアブラムに現れて言われた。「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」アブラムは、自分に現れてくださった【主】のために、そこに祭壇を築いた。

12:8 彼は、そこからベテルの東にある山の方に移動して、天幕を張った。西にはベテル、東にはアイがあった。彼は、そこに【主】のための祭壇を築き、【主】の御名を呼び求めた。

12:10 その地に飢饉²が起こったので、アブラムは、エジプトにしばらく滞在するために下って行った。その地の飢饉²が激しかったからである。

この記述は、神がイスラエルの民の父祖となるアブラムすなわちアブラハムを選び出され、彼とその子孫に与えると神が約束されたカナンの地に、彼が入ったその直後のものです。アブラムはその地に祭壇を築き、礼拝すなわち神との交わりを持ち始めます。ところが彼はすぐにその祭壇を離れ、約束の地を出て行くことになるのです。その理由となる言葉が「飢饉」と訳されている本来のラーアーヴです。このようにラーアーヴとは本来、**神の祭壇を離れる、神との交わり、関わり、つながりから離れる、神の約束の地から出て行く**という意味があると考えられます。エデンの園の象徴いちじく、その家という意味のベタニア、イエシュアはそこから出て行かれ、そしてラーアーヴ「空腹」になりました。つまりこの出来事には、人が創世記にあるエデンの園から追放されたあの出来事と、アブラハムを象徴とするイスラエルの民がカナンの地、神が与えると約束された地から出て行くことが結びつけられて表されているのです。アブラムはエジプトに下って行ったとありますが、そこは後に彼の子孫たちが奴隷の苦しみを受ける場所です。このエジプトに始まり、アッシリア、バビロン、ギリシャ、メディア・ペルシャ、そしてローマ、多くの国がイスラエルを奴隷とし、約束の地カナンから何度も彼らを追い出しました。それはエデンの園でのアダムとエバのように、イスラエルが神に聞き従わなかったために、神がそのように仕向けられたのです。「ベタニアを出たとき、イエスは空腹を覚えられた」という、一見何の変哲もないただの状況説明と見えるこの記述には、人がその罪によって神との交わりの中から追い出された、遠ざけられたという事実が「型」として表されているのです。次の「葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えた」ともあり、その事実をさらに強調しています。なぜならこの「葉の茂ったいちじくの木」のいちじくの葉は、まさに神に聞き従わなかったアダムとエバ、罪を犯した人、神から離れ、その覆いを失い、むき出しの裸になった哀れな人を象徴するものだからです。

創世記【新改訳 2017】

3:7 こうして、ふたりの目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。

そんな人に対し、神は彼らをそのままの状態ですべてに生きる事ができるように、永遠のいのちの木への道を閉ざされました（創世記 3:22～24）。イエシュアはいちじくの木に向かって「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように」と言われましたが、それは人が「今後いつまでも」つまり永遠に「食べることがない」食べることができず、飢えるもの、そして生き続けることができず、**人はやがて必ず死ぬ、死ぬものとなった、神がそのようにされたという事実が表されているもの**と考えられます。このように、イエシュアはエデンの園の象徴であるいちじくを用いて、罪によって神と人との交わり、関わり、つながりが壊れてしまったこと、またそれによって人がいかに哀れな、苦しい状況に置かれることとなったのかということを表しておられるのだと考えられます。

2. 宮きよめ

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:15 こうして彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮に入り、その中で売り買いしている者たちを追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。

11:16 また、だれにも、宮を通して物を運ぶことをお許しにならなかった。

11:17 そして、人々に教えて言われた。『わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではないか。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巢』にしてしまった。』

11:18 祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。群衆がみなその教えに驚嘆していたため、彼らはイエスを恐れていたのである。

11:19 夕方になると、イエスと弟子たちは都の外に出て行った。

この出来事は、イエシュアが宮をきよめられたという、イエシュアの「宮きよめ」と呼ばれる記述です。しかし「きよめ」ということは本来あったもとの状態に戻すということ、あるいはより良い状態にすることです。確かにここでイエシュアは神殿内で暴利をむさぼる両替人や商人を追い出しておられますが、結局ご自分も弟子たちを連れて出て行かれ、残ったのはこの出来事を聞いた祭司長たち、律法学者たちのイエシュアに対する激しい殺意です。また両替人と商人が追い出されたことで神殿内は献金もいけにえもささげることができず大混乱に陥ったことでしょう。このように、状況は良くなるどころかさらに悪くなっており、「宮きよめ」と呼ぶにはいささか語弊があるように思われます。ですからこれはイエシュアが実際にここで言われているように「あらゆる民の祈りの家と呼ばれる」「わたしの家」は、「強盗の巢」神に逆らうサタンの家となったということ、神と人すなわち神とイスラエルとの関係は、壊れてしまったのだということが表されているのです。つまり宮はきよめられたのではなく、**宮は壊され、その機能を失い、神の御前から追い出され、遠ざけられてしまった**のです。

そしてこれらの出来事は過去のものではありません。これから後に起こる出来事、終わりの日の「型」なのです。ヨハネの黙示録にこうあります。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

6:12 また私は見た。子羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。太陽は毛織りの粗布のように黒くなり、月の全面が血ようになった。

6:13 そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが大風に揺さぶられて、青い実を落とすようであった。

6:14 天は、巻物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山と島は、かつてあった場所から移された。

この預言は、文字通りの災害を予告しているものではありません。大きな地震も、太陽が黒く、月が赤く見える現象も、隕石落下も過去に何度も何度も起こっているからです。ここに記されている黒い太陽、血に染まった月とは、やがて現れるサタンの子、不法の子、獣と呼ばれる反キリストを表しています。そして天の星とはエルサレムの神殿とそこに仕える祭司たちのことです。反キリストによって神殿は汚され、「巻物」すなわち聖書は捨てられ、祭司たちは殺され、また追い出される日が来るのです。イエシュアが見ておられた実のないいちじくの木とは、この「大風に揺さぶられて、青い実を落とす」されたいちじくの木であり、やがて反キリストによりエルサレムの神殿が蹂躪され、汚されること、そしてイスラエルの民が再びカナン地の地から、「かつてあった場所から移される」こと、追い出されるということを指し示しているのです。このように、イエシュアは世の終わりに起こる出来事を、エルサレムの神殿とイスラエルの民の上に起こることを表してこれらのことをなされたのだと考えられます。このように、ここに記されたイエシュアの言動、行動は決して宮きよめなどではなく、むしろ逆に宮が汚されること、壊されることを

表しておられたのです。しかし考え方によってはこれが神のやり方、きよめ方であるとも言えます。神のきよめとはこのように、私たちの持つ概念のそれとは大きく異なっているということが表されているとも言えます。

3. 枯れる

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:20 さて、朝早く、彼らが通りがかりにいちじくの木を見ると、それは根元から枯れていた。

11:21 ペテロは思い出して、イエスに言った。「先生、ご覧ください。あなたがのろわれた、いちじくの木が枯れています。」

さて、いちじくの木は枯れてしまいました。ペテロは「あなたがのろわれた」、イエシュアが呪ったので木は枯れたと言っています。目に見える状況としては確かにそうかもしれません。しかしここに使われている「呪う」という意味のアーラル(רָאָה)は本来、人ではなく蛇、すなわち悪魔とも呼ばれるサタンを神が呪うという意味の言葉なのです。

創世記【新改訳 2017】

3:14 神である【主】は蛇に言われた。「おまえは、このようなことをしたので、どんな家畜よりも、どんな野の生き物よりものろわれる。おまえは腹這いで動き回り、一生、ちりを食べることになる。

3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」

このように蛇、サタンの頭は踏み砕かれます。それが神の呪い、アーラルの持つ本来の意味です。しかし同時に蛇は「かかとを打つ」ともあります。この「かかと」のことをヘブル語でアーケーヴ(עֲקֵב)というのですが、アブラハムの子イサクの子ヤコブ(יַעֲקֹב)、後にイスラエルとなる彼の名とこのアーケーヴとの結びつきがあることは、このようにヘブル語の綴りを見なければなかなか気づけない事実です。つまりサタンの頭が打たれることと、ヤコブすなわちイスラエルの、その子孫が打たれること、それがこの「呪う」という意味のアーラルが指し示す事実、神のご計画なのです。

そしていちじくの木は「枯れて」しまうのですが、ここに使われているヤーヴェーシュ(יָבֵשׁ)は本来、大洪水が全地上を襲った、あのノアの箱舟の出来事で、その滅びが終わること、過ぎ去ることを表した言葉です。

創世記【新改訳 2017】

8:1 神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた。神は地の上に風を吹き渡らせた。すると水は引き始めた。

8:2 大水の源と天の水門が閉ざされ、天からの大雨がとどめられた。

8:3 水は、しだいに地の上から引いていった。水は百五十日の終わりに減り始めた。

8:4 箱舟は、第七の月の十七日にアララテの山地にとどまった。

8:5 一方、水は第十の月まで減り続け、第十の月の一日に、山々の頂が現れた。

8:6 四十日の終わりに、ノアは自分の造った箱舟の窓を開き、

8:7 鳥を放った。すると鳥は、水が地の上から乾くまで、出たり戻ったりした。

ここで「水が地の上から乾く」という箇所、聖書で最初のヤーヴェーシュがあります。このように、ヤーヴェーシュ「枯れる」とは本来、神の裁き、滅びの終わり、そして新しい地の始まりを指し示す言葉だと考えられ、終わりの日に、イスラエルを打ったサタンは打たれ、新しい時代が始まるということが、このイエシュアがのろわれ、枯れたいちじくの木には表されていると考えられます。そしてその新しい時代とは、どんな時代、どんな世界なのでしょう。次のイエシュアの御言葉にそれが表されています。

4. 信じなさい

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:22 イエスは弟子たちに答えられた。「神を信じなさい。」

11:23 まことに、あなたがたに言います。この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言い、心の中で疑わずに、自分の言ったとおりになると信じる者には、そのとおりになります。

11:24 ですから、あなたがたに言います。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。

この御言葉は、問題や困難を解決するため、あるいは自分の願いを叶えるためのクリスチャンの信仰を励ますものとしてよく用いられています。しかし文脈の状況からしてイエシュアはエルサレムを指して「この山」と呼んでおられ、それが「海に入れ」とはこの都の滅び、崩壊を予見して語っておられるものと捉えることができます。しかしもしそのようなことが起こっても「神を信じなさい」とイエシュアは言っておられるのだと考えられます。ではその神の、何をどう信じればよいのでしょうか。ここに使われている「信じる」という意味のアーマン(אָמַן)は本来、以下の御言葉を指し示すものです。

創世記【新改訳 2017】

15:1 …【主】のことばが幻のうちにアブラムに臨んだ。「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」

15:5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

15:6 アブラムは【主】を信じた。それで、それが彼の義と認められた。

15:7 主は彼に言われた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与える…。」

これは神がイスラエルの父祖アブラムに約束された御言葉です。彼はそれを「信じた」とあり、ここに聖書で最初のアーマンが使われています。たとえエルサレムがサタンに打たれ、滅ぼされようとも、神がアブラムに約束されたこの御言葉、イスラエルに対するこの神のご計画を信じなさい、とイエシュアは言っておられるのです。しかしくれぐれも誤解しないでいただきたいことは、人がそれを信じるから、人の信仰の力がそれを現実にもたらすわけではありません。それは神が必ず「そのとおりに」なされることだから、信じるに値する、信じるべきものだから信じなさいということです。このように、神を信じるとは神

のご計画についてのものであり、そのご計画がどのようなものであるかを知ること、理解することは、私たちが神を信じる上でなくてはならないものであると言えます。そうでなければ私たちは神を、また聖書を自分の都合の良いように、自分勝手な、人間的な考え方で捉えてしまうからです。ともかく、私たちの信仰に力があるわけではありません。必ずその御心を成し遂げられる神に、イエシュアに力があるのです。

5. 赦しなさい

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:25 また、祈るために立ち上がる時、だれかに対し恨んでいることがあるなら、赦しなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの過ちを赦してくださいます。」

この御言葉も私たちの生き方、特に対人関係の在り方に示唆を与えるものとしてよく用いられます。しかしよくよく考えてください。私たち人、果たして人の罪を赦す権威が、そのような権利があるのでしょうか。たとえ私があなたの罪を赦しますと言ったところで、神があなたの罪をお赦しにならなければ滅びるのです。つまり私たち人には人や自分を罪に定めることはもちろんのこと、赦す権威さえもないのです。このように、人を裁く権威が与えられているのはイエシュアただお一人だけです（マルコ 2:10）。ではこの御言葉はどう理解すれば良いのでしょうか。ここに使われている「赦す」という意味のサーラハ (נָסַח) は本来、以下の御言葉の中で用いられました。

出エジプト記【新改訳 2017】

34:5 【主】は雲の中であって降りて来られ、彼とともにそこに立って、【主】の名を宣言された。

34:6 【主】は彼の前を通り過ぎるとき、こう宣言された。「【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神。怒るのに遅く、恵みとまことに富み、

34:7 恵みを千代まで保ち、咎と背きと罪を赦す。しかし、罰すべき者を必ず罰して、父の咎を子に、さらに子の子に、三代、四代に報いる者である。」

34:8 モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏した。

34:9 彼は言った。「ああ、主よ。もし私がみこころにかなっているのでしたら、どうか主が私たちのただ中にいて、進んでくださいますように。確かに、この民はうなじを固くする民ですが、どうか私たちの咎と罪を赦し、私たちをご自分の所有としてくださいますように。」

これは神である主がモーセに現れ、語られた御言葉と、モーセがその民イスラエルのためにとりなして祈った祈りです。「どうか私たちの咎と罪を赦し、私たちをご自分の所有としてくださいますように」という彼の祈りの中に、聖書で最初のサーラハがあります。このように、「赦す」サーラハとは本来、イスラエルの民が神の所有の民となる、ということを示す言葉なのです。ちなみにここでのモーセはイエシュアの「型」です。ですからこれも先ほどの「神を信じなさい」という御言葉と同様に、私たちが自由に、勝手に罪を赦す力があるのではなく、ただ神だけが「恵みを千代まで保ち、咎と背きと罪を赦す」ことがおできになるのであり、神はイエシュアによって、その十字架の死というとりなしによって罪赦されたイスラエルの民を「ご自分の所有として」くださるということであり、私たち人が誰かを赦す、あるいは赦さないことに言及したものではないということです。しかしそれでもあえてこの「赦しなさい」という御

言葉を行おうと言うならば、その対象となる人をイスラエルにつながる者、神の「所有としてくださいますように」と、ここでのモーセのように祈ることを、イエシュアの御名によって祈ることを心からお勧めします。ともかく、イスラエルの民がサーラハ、罪を赦され、神の所有の民とならなければ、私たち異邦人に希望はありません。なぜなら神はアブラハムの子孫である彼らによって地上のすべての民族を祝福するというご計画を立てておられ（創世記 12:3）イスラエルの都シオン、エルサレムから国々を教え導かれるようになるからです。

ミカ書【新改訳 2017】

4:1 その終わりの日、【主】の家の山は、山々のかしらとして堅く立ち、もろもろの丘よりも高くそびえ立つ。そこへもろもろの民が流れて来る。

4:2 多くの国々が来て言う。「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてください。私たちはその道筋を進もう。」それは、シオンからみおしえが、エルサレムから【主】のこゝろが出るからだ。

このように、神の赦し、そして救いは単なる無罪放免が言い渡され、後は各自ご自由にどうぞというようなものではなく、少し固い言い方をすれば、神の法と秩序により統治された国家を建て、これを確立することにあるのです。そしてこれを一言で言うならば「神の国」ということになります。この「神の国」こそが、神による赦しの実態でありその具現化した姿なのです。一見宗教的、抽象的に捉えられがちな「信じる」「赦す」などというこれらの言葉も、実は非常に具体的で実際的な情報を持っており、聖書にはそれらの情報が確かに記され、表されているのです。

そして冒頭で述べたように、神はこれを壊れたもの、まさに根から枯れた木のように、完全に破壊されたものからお造りになるのです。破壊と再生、このような神のご性質は、闇から光、病から癒し、死からよみがえり、嘆きから踊りなどという言葉にも言い換えられて、聖書に記された様々な出来事に反映されています。神を知るとは、この神の破壊と再生という、相反する二つのご性質とその御業を知ることであると言えます。今この世界全体はいよいよその究極的な現れを見ようとしています。それはすなわち今の世が滅び、「神の国」が建てられるということです。これが現実であり、信じるべき、待ち望むべき私たちの未来です。その日、その時は確実に、刻一刻と近づいています。